

久米邦武追っかけの旅

鴉飼 直哉(2012年2月)

一 ウェネチア 威尼西の巻

2005年4月企業OBペンクラブ 800字文学館資料

岩波文庫の「米欧回覧実記(四)」を片手に威尼西へ行った。経験十八年の添乗員さん曰く「何ですか、これは。変わったガイドブックを持つてくる人は沢山いますが、こんな物で街を歩くお客さんは初めてです。何か漢文みたいですね。羅馬くらいならローマと読めますが、仏羅稜、多加納、米蘭、熱那(注1)、これはお手上げです」「威尼西がヴェネチアですか、ちよつとメモさせて下さい」「これを見ると、使節団一行もゴンドラに乗ったんでしようね」

『艇ノ製作奇異ナリ、舳主鶯起シ、艇底円転トシテ、舳ニ屋根アリ、中に茵席ヲ安ンス、棹ヲ打テ泛泛トシテ往返ス、身ヲ清明上河ノ図中にオクカカ如シ、市塵鱗鱗トシテ水ニ鑑ミ、空気清ク、日光爽ヤカニ、嵐翠水ヲ籠メテ、晴波淪紋ヲ黻ム、艇ハ雲靄杳渺ノ中ヲユク、飄飄乎トシテ登仙スルカ如シ』
昨年十月の例会で泉三郎氏の講演を聞いてから、私は「米欧回覧実記」に酔っている。一頁をめくる毎に驚きの連続だ。これほ

ど情報がぎつしり詰まった本は見たことがない。

岩倉使節団の足跡を探りながら丸五日間歩き回った。多分、五十年前の姿をそのまま残していることにおいて、このヴェネチアは筆頭だろう。サンマルコ広場、大鐘楼、ドゥカレ宮など、本に出ている風景そのものだ。

謎も残った。一行が泊まった新約克(ニューヨーク)ホテルが誰に訊いても判らない。

こだわって見て回ると面白いことに遭遇する。サンマルコ広場の図(左上)は一体どこから見たのだろう。コの字型に囲まれた広場では手前の博物館部分が邪魔になる。調べてみてやっと判った。元々教会があつたのをナポレオン軍が破壊し、一八〇九年に取り壊されている。広場の手前は空き地だった。

鐘楼に登った。『中ニ傾斜ノ階ヲ施シ、三十七面ニテ鐘下ニ達ス』代わりに、エレベーターで一気に上がれるのが、唯一の違いだ。『此日快晴ニテ、コノ楼ニ登リテ臨眺セシニ、(中略)当府ノ衆島ヲ水波ノ中ニ浮キ出ス、景色甚ダ佳ナリ』 (完)

(注1) フローレンス、トスカーナ、ミラノ、ゼノア



二 実記を片手にリギ山へ

2008年2月企業OBペンクラブ同人誌「悠遊」第15号掲載

六月末から、小学校時代の友人夫妻と四人で十二日間ほどスイスに行った。我が家の二人にはスイスは初めての旅だった。スイス好きの私たちは怪訝に思われるだろうが、私のお目当てはマッターホルンよりもユングフラウよりも、まずはリギ山だ。リギ山と言ってもよほどの好きか、飽きるほどスイスに行った人ではないと登ったことはないだろう。山岳地帯への入り口に当たるルツェルンから船でフィアヴァルトシユテツテ湖を一時間、ウイツツナウという小さい町から登山鉄道で登った所にある。標高一七五〇メートルだから、四千メートル超の山並の中では数字を見ただけでは特に魅力は感じない。

スイスへ行くなら是非ともリギ山と考えた理由は、例によって米欧回覧実記である。

岩倉使節団は一八七三年六月十八日ウイーンを出発し、ミュンヘン経由で首都ベルンに二十日到着。九日間滞在後、六月二十九日にジュネーブへ向かう。この間、スイス政府は一行を二泊三日の山岳地帯観光に招待する。

我一行已ニ「ベロン」府ニ著シ、大統領ニ謁ス、接伴掛「シーベル」氏言フ、当国ノ政府ハ冗費ヲ汰スルヲ勉ム、使節ヲ享待スル、他国ノ豊侈ナルカ如キヲ得ス、只当国ノ佳山水ヲ以テ、

其款待ヲ享ニアツヘシ、且南方ノ地ニ於テ、新ニ架成セル山路仰高鐵路アリ、人民ミナ使節ト之ヲ落成センヲ望ム、請フ二日間ヲ勞セヨ、衆ミナ悦ヒ從ンヲ願フ、

ベルンを出発した一行は、鉄道、船、馬車を乗り継いでトーン、インターラーケン、ブリュニツヒ、サムネンを経由してルツェルンに入る。途中、インターラーケンでは遙かに見える山岳地帯の景色に恍惚とし、サムネン村では村人たちの大歓迎を受ける。ここでウイリアムテルの話聞いて、愛国心が自由と独立を維持する原動力であると久米邦武は説く。そして出迎えたスイス大統領等政府要人と共に、船でウイツツナウに向かう。

チューリッヒから直接ルツェルンに入った私は、実記を片手に一行に合流した気分になって、ウイツツナウ行き定期船に乗り込んだ。船からの景色は岩倉具視や伊藤博文たちが見たものと同じだと、妙に感慨にふける。

船ハ湖面ヲ輾リサル、水濶ニ山峻ナリ、時ニ一陣ノ細雨スキルニ逢フ、後湖ハ猶晴レ、迷霧飛雲アリテ峰峰ニカ、レリ、遠眺ノ清朗ヲ欠ケトモ、雲陰ノ变幻ニテ、湖上ノ奇景ヲ得タリ、と書かれた。ページをめくりながら、写真を撮りまくった。

「ウイツナウ」ノ埠頭ニハ、人家數十戸アリ、寺塔亦ヲ抽ンテ、頗ル美観ナリ、此ニ「エルイツキ」ノ蒸気車駅アリ、此処ノ鉄道、并ニ瀛車ハ、今度当国ニテ新ニ發明セル建築ニテ、山嶺ヲ上下スルモノナリ、本日ハ其落成ニカ、ル

実記の銅版画と比べると、同じ場所に教会の塔があり、リギ山行きの登山鉄道の駅もある。ここから先は余計な説明は不要である。漢文訓読体の出番だ。

当処ノ勝景ハ、國中ニ奇絶スルヲ以テ、此ニ車路ヲ修メ、四方ノ游人ヲシテ、高峰ニ上リ、縦覧ヲ快クセシムル目的ナレハ、車ノ装置モ、四面ミナ玻璃ニテ眺望ヲ快クセリ、此車ニ上リテ山路ヲ輾リ上レハ、湖水山峰ミナ、目下ニ落ツ、半腹ニ及フコロ、一ノ洞道ニ入ル、此ヲ出レハ、下ニ百尺ノ谷アリ、鉄橋ヲ以テ谷ヲ横絶シテ去ル、山岩壁ヲ削リ、樹木疎疎ニ生シ、前ニ懸泉アリ、下ニ湍流アリ、風景壮ナリ、

リギ山山頂から見る雄大な景色は、初めてスイスの山並を見る者には圧倒的だ。とは言つても、グリンデルワルドやツェルマツトで間近に迫る山々を見る前のことではあるが……。ともかく実記を開いてみた。

山頂からの豪快な景色に恍惚とした美文を期待したがこの光景を久米邦武は、

此峰頂ヨリ俯瞰スレハ、高峰ハ怒濤ノ如ク、低巒ハ跳波ノ如ク、南方ニ雪色玉ヲ抛ツカ如キハ、「ユリ」郡ノ郡嶽ナリ、(以下略)

と、これだけしか書いていない。さすがの久米も言葉を失ったのか、得意の「○○○○トシテ」の恍惚感表現もここでは姿を表さないのが残念だ。

写真撮るよりも、まず今回の目的のリギクルム・ホテルに行つてみた。一行が宿泊したこのホテルは昨年リニューアルしたこと。念のため受付で訊ねてみたが、そんな昔の話は誰も知らない。結局、百三十五年前と変わらぬ景色を見たという自己満足だけで、客観的な成果は何もないままにスイスの初日は終わった。

実記には

是ヨリ食堂ニ於テ、鐵路落成ノ宴会ヲ開ク、会食ノ男女百余人、食享盛饌ヲキハメ、食間ニ「スピーチ」アリ、衆人ミナ器械師ノ偉業ヲ称賛シ、此席ニテ褒賞ノ金杯ヲ与フ、四時ニ至リ徹宴シ、竟ニ此ニ宿ヲナス

と書いてある。大統領が海外からの珍客と臨席しての祝宴は、当時は大ニュースであつただろう。そう考えると、この機会をもう少し生かすべきだ。

二日目、健脚の友人夫妻は世界一の急勾配のピラトウスへ、家内はスケッチと各自が自由行動と決め、私はルツェルン歴史博物館、中央図書館、ウイツツナウ郷土博物館へと回ることにした。

どこでも親切に対応して貰えたものの、誰も Iwakura-Mission を知っていない。

ルツェルンの二日間があつという間に終了。あと十日間、実記は忘れてスイスの美しい山々を見て回った。

帰国して驚いたことに、中央図書館の館長から厚い封筒が届いていた。岩倉使節団のリギ訪問を書いた当時の新聞記事が入って

いた。いろいろな方にお手数をかけ、古典フォントで書かれたドイツ語を翻訳して頂いた。そのうち、大統領主催の晩餐会での一行の服装についての部分が特に興味深い。

「正副使三名は藍色の式服と白色のズボンを着用し式服の襟や胸は金色の刺繍で豊かに飾られ、頭には *nebelspalte* (ナポレオンの帽子のような三角形の帽子) をかぶっていた」
続いてルツェルン歴史博物館からは、当日のリギクルム・ホテルの宿泊人名簿のコピーが届いた。*Iwakoura* や *Kouni* などの名前がある。さっそく米欧回覧の会に報告した。どうやら二つとも新発見だったようだ。

お礼の手紙には、「まだ日本でもスイスでも殆ど知られていない岩倉使節団の話を一緒にPRしよう」と書いた。その後も口伝え(メール伝え)で知り合ったスイスの人たちが増えたのが嬉しい。本当にこの国の人は見ず知らずの旅行者に親しみを感じさせてくれる。こんな旅をこれからも探したい。

【追記】

このウィツナウ・リギ鉄道の祝賀会は、スイスに関する旅行ガイドブックには、当然書いてあるものと思っていた。

初めてのスイス行きに備えて、書店で調べてみた。ところが、リギ山、登山鉄道、リギクルム・ホテルなどに関する項目の中に岩倉使節団に触れたものが全く見当たらない。スイスの登山鉄道

の本、スイス在住の日本人の書いたエッセイ、旅行社のパンフレットなどにもこの祝賀会の話は書いてない(唯一の例外として泉三郎著「米欧回覧・百二十年の旅」(図書出版)を挙げるのが精一杯だ)。なぜか？

池田光雅著「永遠のスイス登山鉄道」(東京書籍)に「リギクルム・ホテルには斉藤茂吉やマーク・トウエインが泊まった」と書いてあったので国会図書館で調べてきた。

『世界紀行文学全集⑥スイス・イタリア編』には大正から昭和初期にスイスに行った作家の随筆が沢山載っている。

斉藤茂吉、武者小路実篤、茅野雅子、土岐善麿、林久男、東山魁夷、阿部次郎などルツェルンの旅を楽しんではいるがその中でも「実記」の引用は皆無である。この人たちが使節団の世界一周の冒険を知らなかったとは考えられない。海外紀行文が少なかった時代、貴重な情報源であったはずだ。なぜ「実記」は無視されたか？ 考えられる理由として、

* 条約改定の失敗のため使節団に対する評価が芳しくなく、

「実記」の歴史的価値を見過ごされた。

* 当時の文壇はもっぱら欧米の作品に精通することに目を奪われ、日本文化軽視の傾向が強かった。

これは全く私の素人考えにすぎない。この分野に詳しい方々のご意見を伺いたい。

三 奥國「セメリング」鐵路の巻

2007年米欧回覧の会資料

昨年(二〇〇六年)の十二月、岩波文庫版「米欧回覧実記(四)」を片手にウイーンからセメリングへ行つた。

ユネスコ世界遺産にも登録された「セメリング鉄道」は、標高八百九十六mのセメリング峠でアルプス山脈を越える。一八五四年七月開通当時には「世界最高地点を通る鉄道」であつた。それから丁度二十年目の一八七四年六月三日、岩倉使節団一行はここを経由してベニスからウイーンに向かつている。その様子を久米邦武は詳しく報告している。

セメリングはウイーンから約七〇キロ。ウイーン・ノイシュタットで特急に乗り換え、二時間の距離である。実記には、

此「セメリング」ノ景ハ、人目ヲ聳カシ、鐵路建築ノ壯ヲ極メ
タレハ、今日鐵路ノ勝ハ、此ヲ第一トナスヘシ、(中略)是
ヨリ高名ナル山險ニカ、ル

とあり、ここから久米流のレトリックで、まるで黒部峡谷鉄道よりも厳しい岩山が延々と続いているような期待をもたせてくれる。私たちはウイーンを早朝に出発。ガイドブックには、左側が景色がよいと書いてある。運良く食堂車で窓際の席が空いていた。車窓から写真を撮りまくつた。下の写真の中央、小高い山の上に

小さい城があり、谷底には細い道沿いに数軒の家が見える。使節団も同じ景色で感激しただろう。

ノイシュタットで乗り換えた列車は、グロクニッツ駅辺りからやつと山道に入る。セメリング到着時間まで三十分しかない。いよいよ「奇巖怪石」

がごろごろする地域になるはずだと緊張したが、一向にその気配がない。

「筭ヲ束シタル如ク、天ニ向ヒテ攢立シ」た岩山は一向に見当たらない。線路は「時ニハ規ノ如ク回り、時ニハ弓ノ如ク彎シ」と書いてあるとおり、山裾を縫うように走っている。始めのうちには低い雲がかかっていたが、高度が上がる



上ニ古城ヲ歎立シタルハ、天柱ノ折レタルカ如シ、
時ニハ高サ千尺ノ上ヲ走り、谷底ノ大道、絲縷ヲ
拖キ、豆人寸馬ノ往來スルヲミル、

に従って、「雲ヲ渡ルノ廊ヲ走ル」気分になる。冒頭の写真のように、なだらかな風景が続く。景色は確かに綺麗で、世界遺産になっただけのことはある。もう一度岩波文庫で確かめてみた。

凜森乎トシテ、鐵路ノ前後ニ錯立シ、面面ノ峯頂、一トシテ
險危ナラザルハナク、峻拔ナラザルハナシ

はオーバーな表現だな、と思っっているうちにセメリングに到着してしまう。何か拍子抜けしたような印象だ。一体なぜなのだろう？

考えられる理由は三つくらいある。

(1) 奇岩怪石の地帯は、セメリング駅からトンネルを通った反対側(ウイーンから来るとトンネルの先)である可能性。

実記にはときどきこの類の間違いがある。しかし、世界遺産に登録されているのはグロクニツツ駅からセメリングまでである。実際に見たわけではないが、この仮定は成立しそうにない。

(2) 一行は難工事の終わった二十年後にここを通っている。工事の結果、至るところに地盤の岩肌が露出して「岩間ニ疎疎樹鬣ヲ生ズ」状態だったが、百三十年後の今日では、樹木に覆われた穏やかな景色だけになっている。

これは充分考えられる要素だ。しかし、その分を割り引いても過剰な表現が多いように感じられる。世界遺産の対象となった石橋は今でもそのままの姿だが、いくら調べても二層までしかない。「弧形ノ柱ハ、三層四層ニ累架シ」は、数字に常に正確な久米邦

武らしくない。そう思ってみると、「上ニ古城ヲ敬立シタルハ、天柱ノ折レタルカ如シ」は如何にも過激ではないだろうか？

(3) 車中、久米邦武は居眠りをしてしまい、実際には見ていなかった。これが私の仮説である。

久米さんだつて人の子だ。連日の疲れから、長旅の車中では気が緩んで寝込んでしまったのではないだろうか？

読み直すと、セメリング鉄道の表現は気になる部分が多い。そもそも風景描写は紀行文としては余りにも美文過ぎており、

練りに練った文体は何か自己陶酔的な印象さえ与えるものだ。「臥龍ノ頷」「雙虎ノ踞」「靈犀ノ燃ル」など漢字者ならではの表現もあるが、それにしても何か迫力に欠けるように思えてくる。団員の中の誰かが書いた原文に、久米邦武が銅版画の素材となった絵を見ながら味つけをしたのではなからうか。

駅では、まず実記に銅版画のあるトンネルの写真を撮った。

「洞口(トンネルの出口)ノ一驛、人家六七戸アリ」と書いてあるが、駅舎の他は何もなく人家らしいものは全く見えない。運良く通りかかった乗合タクシで街まで行ってみた。数軒のリゾートホテルがあるだけで、若いスキー客が何人かバスを待っている。人影のない小さい街の写真を撮り、一時間ほどで引き上げた。帰路は急行を避けて鈍行にした。無人駅をのんびり停まって行くほうが気分がよい。どうやらこっちが正解らしい。

四 久米邦武 追うかけの旅(サンフランシスコの巻)

米欧回覧の会「実記を読む会」2008.09.11

(二)ラルストン・ホール

丁度一カ月前、仕事の関係でシリコンバレーへ一週間ほど出かけた。合間に一日余裕がとれそうだったので、例によって実記第一巻を鞆の中に忍ばせておいた。事前に計画をたてる時間が全くとれなかったので、往きの機内で第三章と第四章の「サンフランシスコ市の記」(上下)を読んだ。一九七〇年代にサンノセに約七年間住んでいた私は、これまでに東京・サンフランシスコ間は百二十回くらい往復していたが、実記の魅力にとりつかれてからは、初めての旅である。岩倉使節団の足跡を辿ってみたい場所が山ほどある。三十年前に訪問された泉(二郎)さんのお勧めもあって、何はともあれ Ralston Hall に行くことにした。

インターネットで調べたら現在はNDNU(Notre Dame de Namur University)のキャンパスの中にあり、アドレスは1500 Ralston Avenue と分かった。空港から San Jose へ向かう途中にある Ralston Avenue は見覚えがあったので、サンフランシスコからタクシーで出かけるつもりだったが、実記には鉄道で Belmont に行ったと書いてあるのを見て気が変わった。サンフランシスコから Caltrain で二十五分、運賃四ドルだから安くてよい。この路線は当時の Southern Pacific 鉄道が建設したもの。



写真は Ralston Hall の正面。1868年に建てた邸がそのままの姿で残っている。現在、国の歴史的記念建造物(National Historic Landmark)の指定を受けている。

なんとか大学の入り口に辿り着いたが今度はキャンパスの中で迷う。二十分くらい探し回って Ralston Hall に着いたときには十五ドルになっていた。

玄関のところに「自由にお入り下さい」と書いてあるのを見てそのまま入って驚いた。パンフレットによると、Ralston 氏が夏の別荘として作らせたという豪華絢爛たる内装の部屋が続いている。大広間はベルサイユ宮殿の鏡の間のイメージであるとのこと。入って行くと誰もが実に愛想がよい。廊下ですれ違ふと必ず声

は知らないと言おう。

Belmont 駅から使節団は迎える馬車で行ったそうだが、私はタクシーを拾うことにした。それが誤算だった。閑散とした無人駅で降りたがタクシー乗り場がない。炎天下、ようやく一台みつけたが、わずかに二キロ程先のNDNU



室内の調度品はほとんど当時のままとの事。岩倉使節団の人たちはどんな思いでどこに誰が座ったのだろうか。

をかけてこの建屋の由来などを話してくれる。一九六〇年代にアメリカへ初出張したときに接した「古き良きアメリカ」を思い出させてくれる。シリコンバレーでは、もはや全く経験することのない雰囲気だ。

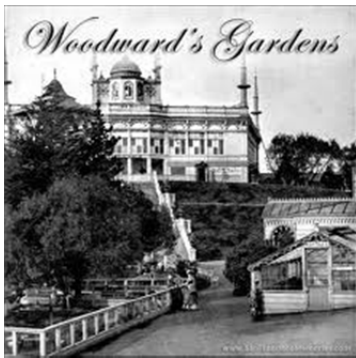
実記によると Ralston 氏は一行がサンフランシスコ入りしてからソルトレークへ向けて出発するまでの間、使節団歓迎の市側の主要人物であったようだ。一行を二度にわたってここに招待した。全員、アメリカの超富豪の邸を見せられて度肝を抜かれてしまったに違いない。

(二) ウッドワルト公苑

実記でサンフランシスコを読むと、「ウッドワルト公苑」という名前がある。動物園、植物園、博物館、絵画館など揃ったレジャー施設で、市内からそれほど遠くない場所らしい。サンフランシスコの観光地なら大体は知っているつもりにも、全く初耳の名前である。「実記を片手にサンフランシスコ探訪」をする以上、このまま放っておくわけにはいかない。

ところがこれが分からない。「米欧回覧実記」の学際的研究の地名索引 p 14 に「Wood-wild Park」と出ているし、p 228 には「Boulevard」ではないか、とも書いてある。インターネットであちこちへサーフィンしていたら、Woodward Restaurant というレストランのページにぶつかった。

そこに「Woodward's Garden Amusement Park が一八六六年から一八九一年までここにあった」と書いてある。サンフランシスコで最初のテーマパークであったそう。こんな公園があったのかと納得した。次の機会には是非ともこのレストランに出かけたいと思う。



上はインターネットから Copy & Paste アドレスは 1700 Mission St.

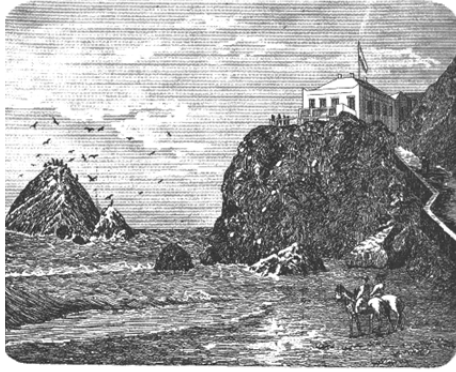
(三)クリフハウス

実記百三頁に「府中ノ美観ハ、已ニ前ニ記述セル、『ウッドワルト公苑』『クリフハウス』等ナリ」とある。

p 94の銅版画(左下)を見ればこれが「クリフハウス」であることはすぐ分かる。

当時、この二カ所が代表的な観光スポットであったようだ。

現代ならゴールデンゲート橋、Pier39、ケーブルカー、など遙かに多彩である。最近のガイドブックにもほとんど書いてないから、日本からわざわざ足を運ぶ人は少ないと思う。私の記憶では、三十年くらい前に会社の上司をご案内して以来行っていない。パロアルトでの仕事が終わりに、サンフランシスコへ移動する道筋から少し寄り道をして、久しぶりに行ってみた。



久米さんはこの風景を恍惚感溢れる描写をしているが、「北にはゴールデンゲートの風景が眼下にあり・・・」とは明らかにフライング。クリフハウスは半島の西に面しており、目の前には大海原が広がっているだけで、ゴールデンゲートは見えない。

実記には触れていないが、多分クリフハウスから市内に戻る途中、半島の北側の崖っぷちの道を通り、ゴールデンゲートを見下ろす道を選んだのではないか。そしてそこで見た豪快な景色の印象が余りにも強く、二つの光景が一緒になってしまったのではないだろうか。この勝手な仮説の是非を決定する資料は今のところ見つからない。

実は、私はクリフハウスから、このルートを通るつもりであった。そしてゴールデンゲート・ブリッジを見下ろす地点に立っている咸臨丸の記念碑を改めて見たかった。残念なことに、借り切っていた小型バスはこの細い道を通ることは禁止されているので断念した。

改めて実記の銅版画を見ると、クリフハウスは近代的な印象を受ける。現代のものとも良く似ている。

その後入手した James Smith 著の San Francisco's Lost Land Marks という本によると当時の面影が残っている唯一のものである。そこにでている沢山の歴史的な写真が面白い。

一八五八年に沈没船の材料で建てられたが、以後火災による消失、再建と改築とを数えきれないほど繰り返して現在のものになったと書いてある。使節団が訪問したときの建物は一八六八年に改築されたものだが、一八八三年、大量の爆薬を積んだ船の座礁による事故で消失。その後七階建ての巨大な建物に生まれ変わったがこれも火事にあうという悲劇の連続に遭遇している。

(四)「ガランドホテル」

サンフランシスコでの一行の宿泊先は、実記に「ガランドホテル」となっているが、「泰使欧米日記」には人数が多いので、文部省関係者と生徒は「オキシテンタールホテル」、司法省関係者は「レッキハウスホテル」と3カ所に分宿したと書いてある(久米邦武文書・三p20)。三つとも一九〇六年のサンフランシスコ大地震で消滅し現存しない。Grand Hotelの場所は宮永孝著「アメリカの岩倉使節団」p34・38に、New Montgomery Ave.とMarket Streetとの南東の角でSheraton Palace Hotelに隣接している、と書いてある。朝食を食へに出たついでに行ってみたが、Bank of Americaのビルがある繁華街で、写真を撮る気にもならなかった。

念のためカリフォルニアの歴史的な写真を探していたら、UCB(University of California, Berkeley)の有名なOAC(Online Archive of California)というサイトに三十万枚もの写真が公開されている事を発見した。右の写真はその中の一枚。



五 「久米邦武 追っかけの旅」あとがき

「米欧回覧の会」の会員になって以来、「米欧回覧実記」の一冊を旅行カバンに忍ばせて出かけるのが習慣になった。

ここにご紹介した四編、

- 〔一〕 ウェネチア 威尼西の巻
- 〔二〕 実記を片手にリギ山へ
- 〔三〕 奥國『セメリング』鐵路の巻
- 〔四〕 サンフランシスコの巻

はいずれも「米欧回覧の会」ホームページに掲載したものを、改めて縮小再編集と加筆修正したものである(〔二〕は原文のまま)。原稿の最初の発表方法が、企業OBペンクラブ800字文学館用資料や「実記を読む会」の発表資料など異なっているため、書き方やスタイル、分量など統一を欠いているがご勘弁頂きたい。なお、その後も同様な旅を続けているが、

- 〔五〕 「ハイランド山水の記」の巻
- 〔六〕 巴里の街角から

は今回は省略した。

「実記」は理屈抜きに面白い。何回読んでも新発見がある。歴史に疎い私には、これは久米邦武の人物像に関心を持った出発点である。そんな動機で始めた「久米邦武 追っかけの旅」をこれからも続けるつもりである。